



7人に迫る 真夏の夜の できごと……

先日の新聞記事を見て愕然……女性が一生に産む子どもの出生率が2005年には1.25人とまたもや過去最低。もう10年以上前から「少子化」が叫ばれていたにもかかわらず、一向に減少傾向に歯止めが利かないのはなぜなのでしょう？親の自己選択や自己責任なる理由を持ち出す政府の見解は、もはやナンセンスとしか思えない数字……。世界の出生率と比較してみても、日本は1、2位を争うほどの低迷状況に陥っています（アメリカ2.04、フランス1.9、スウェーデン1.71、イタリア1.29、日本1.29：2003年統計から）。

政府は、しきりに男女共同参画社会をうたいますが、これは、男女が分担しあって適度に働き、ともに家事・育児にかかわれる余裕のある社会を実現していくことにあるはずですが現実には……子を産みたくても産めないという余裕のない状況に陥っているのではないのでしょうか？。この点、日本の労働時間の異常さには目を見張るものがあります。1週間あたりの労働時間が50時間以上の労働者の割合は約3割に達し、ドイツやフランスの5倍にも及んでいます。そして、小泉政権の5年間でおこなわれてきた増税や保育所の民営化は、少子化を食い止めるどころか、か

えって少子化に拍車をかける結果となっています。

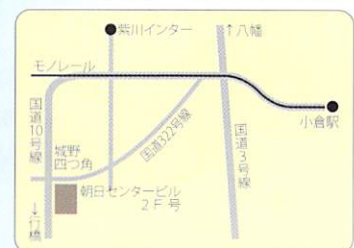
自己責任という名の下に出産、育児、教育のためにかかる費用は高くなる一方、学校の給食費すら支払えない子ども達がこの4年間で大幅に増加しているという異常な事態は、もはや少子化問題を越えた社会のひずみができてきていることを示唆しているように思えます。人が人らしく生き、安心して子を産み育てる（憲法25条：生存権）ためのすべての基盤制度に思い切ったメスを入れなければならない時期がすでに到来しているのではないのでしょうか。

■みなさんと一緒に環境や社会の問題を考え、紙面を作っていきます。

東風

No.13

- 発行日 2006年8月1日
- 発行所 小倉東総合法律事務所
- 編集者 荒牧啓一
- 連絡先 〒802-0062 北九州市小倉北区片野新町2丁目12番21号
朝日センタービル2階
TEL093(932)5575
FAX093(932)5600
e-mail:ponpoko@lime.ocn.ne.jp





貧困を 生きる

幸せだった。人がそう感じて、人生の最期を迎えることができるためには、何が必要なのでしょう。お金があること、子や孫など多くの家族に囲まれること、事業で成功すること、有名になること。いろいろ考えられます。ただ、これだけは言えるのではないのでしょうか。人生の終末、誰とも付き合えず、たった一人で、とりあえず、食べて生きるだけの生活を強いられた人。その人は間違いなく、もう二度と生まれてきたくないと感じて、最期を迎えるだろうって。でも、人がそう感じて、人生の最期を迎えなければならない社会が、今あなたの傍にあります。

信じがたい「生活保護、の実態

「就学援助4年で4割増」というショッキングな見出しの記事が今年1月3日の新聞に載りました。就学援助というのは、簡単に言えば、公立の小中学校で子ども達が文房具代や給食費、修学旅行費などの援助を受けることを言いますが、就学援助を受ける子ども達が4年で4割近くも増えたというのです。東京や大阪では子ども達の4人に1人、全国平均でも子ども達の1割強が就学援助を受けているというデータが示されています。この記事に紹介されている小学6年生を担当する先生の話は信じがたいものです。先生は、鉛筆の束と消しゴム、白紙の紙を用意して授業を始めるそうです。クラスにいるノートや鉛筆を持ってくることができない子ども達に渡すために。そして、卒業文集を制作するため、子ども達に「将来の夢」というテ



マで作文させようとしたそうですが、3分の1の子ども達が何も書けなかったそうです。

生活保護で生活している高齢者の保護費が減額されたことを争っている裁判の原告は、次のように言います。保護費が減額されたのでどんなに節約しても友人とお付き合いするお金が捻出できなくなりました。ですから、誘われても断らざるを得なくなりました。一人でジッと家の中に閉じこもっていると、寂しいので、どうしてもテレビをつけてしまいます。夜、電気代を節約するために、テレビのあかりで食事をし、後片付けをして、一人でふとんに入ると、このまま朝、目が覚めなければいいのといつも思います。何の楽しみもなく、このまま生きていだけなら、命などいららないと思います。

社会から失われる「つながり、

貧困と貧弱な社会保障。これが、この子ども達や高齢者達を苦しめています。さらに、人のつながりよる助け合いを支える地域社会そのものの崩壊が追い討ちをかけています。

よく言われることですが、人は一人では生きられません。人は人とのつながりが持ててはじめて、人としての喜

びが持てるのだと思います。人とのつながりがあれば、人はいくら貧乏でも夢をもって生きることができるのだと思います。憲法25条は、人が人とのつながりをもって幸せに生きていけるだけの生活を保障しているのではないのでしょうか。

しかし、今、私たちはその人とのつながりを持つために必要なものをどんどん失っていつているのです。国や市の政策も、それをどんどん加速させているのです。働けてお金があるうちはいいが、ひとたびお金がなくなると、一人寂しく死んでいかなければならない社会。私たちが向かっているのは、そんな未来です。

私たちはどうしてこの社会で一緒に生きているのでしょうか。そのことを真剣に考えなければならないときが、今ではないのでしょうか。



幸せに生きる権利を訴えてデモする全生連の会員
(2006年3月23日)

「憲法その真実
—光をどこに見るか」

information
information
information

新

鮮

情

報

「俺たちは走り続ける」

健交労九州定温輸送分会
八記久美子・山田敏夫 作曲

坂本修著 学習の友社

「私は、あなたに長い手紙を書くような気持ちで、この小著の筆を取りました」



「私は、あなたに長い手紙を書くような気持ちで、この小著の筆を取りました」の書き出しで始まるこの本は、「民衆」の側の弁護士として47年間活動をしてこられた坂本修自由法曹団長の日本国憲法への熱い思いが伝わってくる。みんなが憲法を読み直し、自分で憲法の価値をつかみ、自分自身の言葉で身の回りの人に憲法の価値を伝えよう。決意し行動に立ち上がった人間の力は決して小さいものではない、と展望を語る。「くずれぬへいわ」と人間が人間らしく生きる未来を残そうと。

「日本初!小学生が作ったコミュニケーション大事典」

北九州市香月小学校平成17年度6年1組34名・著 菊池省三・監修 (有)あらしき書店発行



北九州のある6年生の教室から生まれたA4版155頁フルカラーの大事典。34人の子もたちが、あいさつ力、笑顔力、あいづち力、傾聴力等々コミュニケーションの極意を、さまざまな文献にあたり、TV画面で芸人、アナウンサー、政治家などの分析を行い、果ては突撃インタビューを敢行して多くの人と出会いながら、まとめた「挑戦」の一冊。天晴れ!

北九州市門司区の九州定温輸送から不当解雇された青年労働者6名が、組合つぶしの偽装解散は許さないと親会社ワイケーサービスを相手どり、解雇無効と地位保全の仮処分を申し立てた。その裁判を応援しようと作られた一曲。「安全よりも儲けが大事…延着・トラブル自己責任、文句も言わずに働けよ…俺たちは道具じゃない 金のための道具じゃない 俺たちは生きている 人として生きている…闘いのその中から明日が生まれる 俺たちは生きている 闘って生きている」と労働者の誇りを高らかにうたい、支援を呼びかける。

●みな様からの暮らしの智恵やおもしろ情報、お勧めの書籍など、どしどしお寄せ下さい。



突然の訪問で 「これちょうだい」

画家

みざさ こうき
御笹 更生さん



田川郡糸田町出身。金沢美術工芸大学油絵科卒。中学校の美術教員として勤める傍ら、個展は11回を数える。51歳で退職後は、大宰府9条の会を発足させるなど平和志向の画家として活躍している。大宰府在住。

荒牧啓一君とは、中学校を卒業してからずっと会うことはなかったが、7~8年前に同窓会で巡り会い、それから一気に親交を復活。私の天神での個展に、小倉から突然やって来たのにも驚いたが、アキレス腱損傷でギブスをはめた足を引きずりながら歩いてきたのに、一層びっくりさせられたモノだ。じつは、別の友人に、骨折してギブスの足を引きずって歩き回り、そのために肺に固まった血液が蓄積して、死にそうになったやつがいたので、怖いやら、申し訳ないやら、なんて情の濃いやつなのかといささか感服した。

その時、さりげなく「この絵をちょうだい」と所望されたモノが、事務所を開設してすぐに飾られた瓦に描いた花の油絵だ。ぼくも開設のお祝いにとプレゼントしたのは、寒中に描いた「阿蘇根子岳」。この水彩も飾ってもらっている。去年は、6月。11回目の個展で「筑紫百景」第1回と銘打って展示をし

ていたら、またもや、太宰府に突然現れて、「これちょうだい!」である。10数点の中で、最も人気の高い作品を小倉に持ち帰ってしまった。ありがたいことだ。

ところで、2年前、6月10日に発足した「9条の会」。その賛同グループは、現在は5000を越えている。発起人の方々が政治家でも政党人でもないということがすごいと思う。逆に言うと、政党に対して全てを期待できないと言ったことも知れない。今や日本の政治が、国民総参加のもとでやらないと暴走する危険があると言ったことも知れない。また、国民が、戦前のように社会参加意識が低く、「お上の言うことは何でも聞きます」式のレベルでなくなったと言ったことも知れない。「一人の100歩より、100人の1歩」が現実のものになりつつあるのかも知れない。でも、現在の国会の状況は、大変危険であることは事実。もし、この危機を国民の力で突破することが出来たなら、フランス革命に匹敵する日本での民主主義革命になるのではないかと、密かに夢見ながら、自分に出ることをコツコツとやっている。



筑紫百景(四王寺山四季 一秋一)